

## 共立女子大学博物館所蔵「納戸平絹地竹雀模様着物」

古川 咲（共立女子大学大学院博士後期課程）

### 1、はじめに

本稿で紹介する作品は、共立女子大学博物館所蔵「納戸平絹地竹雀模様着物」（以下、「本着物」とする）（図1）である。本着物は、共立女子学園刊行の収蔵品図録『共立女子学園コレクション 小袖・着物編』「第3章 町人の小袖・近代の着物」に作品No.52として掲載されているほか、展示等を通じて、既に広く社会に公開されている<sup>1</sup>。

改めて、この作品を本稿で取り上げる理由としては、本着物に見られる特徴から、これが明治時代末期の「訪問服（着）」<sup>2</sup>（以下、「訪問服」に統一する）であった可能性を指摘することができるからである。このことについては、前掲図録の作品解説や、これまでの展示等においても触れられることはなかった。

本稿で本着物が明治時代末期の「訪問服」である可能性を指摘する意義は、まず一つに本着物に関連する新たな情報を付加できることにある。具体的には、本着物の外見上の特徴以外に、本着物がどのような時や場面で着用されていたか、本着物を取り巻く情報の一端を明らかにすることに繋がると考える。

また、もう一つの意義としては、明治時代以降に登場する「訪問服」の実態を明らかにできることにあると考える。明治時代以降の訪問服の出現、及びその存在については、研究者の間では広く知られているところである。しかしながら、「訪問服」に関する先行研究は、明治時代以降に発行された新聞・雑誌の記事や、呉服屋が発行するPR誌に掲載された記事を用いたものが多く、現存品を用いた検証作業は行われていない<sup>3</sup>。よって、本稿で取り上げる作品が、その一例であることを示すことは、「訪問服」研究の更なる実態解明に繋がるものと考ええる。

以上より、本稿では、以下の手順で論考を進めていく。まず、はじめに訪問服の概略について述べる。次に、明治期に発行された新聞・雑誌、及び三越（呉服店）が発行したPR誌を用い、明治時代末期の訪問服の実態について述べる。具体的には〈生地〉〈模様配置・模様を表す技法〉〈紋〉〈裾裏の仕様〉の4点から、その特徴を整理する。そして、前段階で整理した明治時代末期の訪問服の特徴と本着物の特徴との比較を通し、本着物が「訪問服」であるかどうかについての検証を行う。

### 2、「訪問服」について

先行研究において「訪問服」は、明治時代に園遊会や夜会といった公的な場以外にも、女性を主体とした会合や気軽な社交の場等、女性の外出する機会が増えたことに伴い、明治時代後期に登場したとされる<sup>4</sup>。「訪問服」の言葉が見られる記事には、1903（明治36）年11月発行の『みやこぶり』所載の「新流行着附見立て」が管見の限りでは早い記事として確認できる<sup>5</sup>。その記事には35、36歳の奥様向、25、26歳の奥様向、15、16歳の令嬢向、7、8歳の令嬢向の訪問服がそれぞれ示されていることから、明治30年代半ば頃から「訪問服」の言葉の使用、及び「訪問服」という着物の分類が存在していたと推測される。但し、1904（明治37）年5月発行の『新小説』所載の「春の裕」や、1910（明治43）年5月27日『朝日新聞』所載の「今夏の流行（下）衣物には変地質上には薄コート」には、訪問服の説明として下記の記述が見られる<sup>6</sup>。

略着（訪問服、散歩服）婦人ものとして最も売れ行きの可いのは、やはり引きつづき御召で、此れは晴着にこそ用いないが、散歩や又一寸した訪問の衣服としては、此れが大いに流行する…（下線部筆者加筆）

1904（明治37）5月『新小説』所載「春の裕」

此処に訪問衣と名は付けるが実は外出の時の洒落着である

1910（明治43）年5月27日『朝日新聞』所載「今夏の流行（下）衣物には変地質 上には薄コート」

上記の記述より、「訪問服」とは、散歩や訪問の際など、人目につく外出の際に着用される「余所行きに着物」或いは「洒落着」に分類される着物であったことがわかる。なお、この時期には、記事の中で「訪問服」が「略着」「散歩服」といった言葉でも示されているように、「訪問服」という言葉がまだ定着していない。そのため、この時期における「訪問服」は、これら以外にも、「花

見衣」「菊見衣裳」「遊山衣」或いは「略着（服）」「半礼服」といった言葉でも表現されている。よって、本稿においては、「訪問服」と表記されていなくても、先行研究において明らかにされている訪問服の特徴から、これと同様の特徴を持つ着物について述べていると考えられる記事も用いて、「訪問服」の特徴を整理する。

次に、「訪問服」における着物の「格」について見ていく。1909（明治42）年4月発行の『新小説』所載の「花見姿」、及び1913（大正2）年5月発行の『婦人画報』所載の「初夏の軽装」には、下記の記述が見られる。

それ故花見、集会、訪問など人の多く出入りする所にシャレ着として、平生（フダン）着では失礼に当たるし、大層もないものを着るのはあんまりだ、というときに人目を惹くに足るものである。（下線部筆者加筆）

1909（明治42）年4月『新小説』所載「花見姿」

訪問着といたしましては、縞物では失礼だが、さりとて礼服でもあまり角立つといったような時、小紋代わりの無地ものが流行いたします。（下線部筆者加筆）

1913（大正2）年5月『婦人画報』所載「初夏の軽装」

この時期の女性の「ふだん着」とは縞物の着物であり、「礼服」とは紋付裾模様の着物である。つまり、上記の記事より、「訪問服」は、礼服である紋付裾模様と日常着である縞物の間に位置付けられる着物であったことがわかる。

最後に、訪問服の内容について述べる。「訪問服」という言葉が文献上に見られる明治時代後期から昭和時代前期までの訪問服は、今日の訪問服のように特定の様式<sup>7</sup>を持つものではなかったことが先行研究において指摘されている<sup>8</sup>。従って、明治時代後期から昭和時代前期における訪問服は時代、または時期によって、その特徴が異なる。本稿では、本着物の特徴と類似した特徴を持つ明治時代末期の訪問服を中心に上げていく。

### 3、明治時代末期の訪問服の内容

表1は、明治時代末期の訪問服の特徴を示した記事の出典、及び記載された内容をまとめたものである。ここでは〈生地〉〈模様配置・模様を表す技法〉〈紋〉〈裾裏の仕様〉の4点から、明治時代末期の訪問服の特徴について述べる。

#### 〈生地について〉

まず、生地については、大別すると、御召と縮緬の2つに大別できる。御召と縮緬は、ともに絹糸を用いた縮織りの生地であるが、製造行程に違いがあり、御召は織る前に糸を精練し、染色してから織るのに対し、縮緬は生地に織った後に精練し、染色を行う。そのため、生地に織り上げる前に精練を行った御召はしっかりとした風合いになるのに対し、縮緬は生地に織り上げた後に精練を行うため、糸と糸の間に隙間ができ、柔らかな風合いになる。

御召に属する生地については、当時の資料に様々な名の御召が見られるが、大別すると無地御召、縞御召、紋御召の3種類に分類できる。一方の縮緬に属する生地も、天蚕糸を使用することによって縞や格子柄を表した山繭縮緬の他、壁縮緬（壁千呂）、小波縮緬、高波縮緬、高波紋縮緬等、様々な種類の縮緬が確認できる。よって、この時期における訪問服の生地は、御召または縮緬に属する生地であれば、特に制限はなかったと言える。

#### 〈模様配置・模様を表す技法について〉

次に、生地の上に表す模様については、付ける場合と付けずに無地とする場合の両方が確認できる。付ける場合には、裾部分<sup>9</sup>に、織りによって模様を表す織り出しの技法、または刺繍で表される。但し、刺繍で模様を表す場合には、生地に御召と縮緬の両方が使用されているのに対し、織り出しの場合には「御召織り出し模様」「織り出し御召」<sup>10</sup>とあるように、御召の生地に限定されることを確認することができる。これは、生地に模様を織り出すためには、糸の段階で既に染色されていなければならないため、必然的に御召が生地とされていたと考えられる。

#### 〈紋について〉

次に、紋については、模様同様、付ける場合と付けない場合の両方が確認できる。付ける場合は、刺繍による繡い紋が3ヶ所に付けられる。この時期の「訪問服」における模様、及び紋の有無の選択は、自由に行われていたと思われるが、裾模様を付けない

場合には、繻い紋が付けられる傾向があった。繻い紋を付けること、刺繻又は織り出しによる裾模様を付けること、或いは繻い紋と裾模様の両方を付けることが訪問服の条件となっていることから、繻い紋と裾模様が訪問服としての格を表していたといえる。

#### 〈裾裏の仕様について〉

最後に裾裏（八掛）についてであるが、この時期における訪問服の裾裏には、表地と別の生地を用いた替わり裾を用いていたことが先行研究において指摘されている<sup>11</sup>。1911（明治44）年11月発行の『婦人画報』所載の「菊見の衣裳いろいろ」には、

さうしてこれ等の洒落着は凡て友裾は用いませんで皆変り色を付けますが、表とあまり懸けはなれた色でなし  
略似寄ってる位の処で、何方かと云えば少し薄い色でございます。

1911（明治44）年11月『婦人画報』所載「菊見の衣裳いろいろ」

とあり、「訪問服」には共裾を用いないことが記されている。

しかし、一例ではあるが、1912（明治45）年6月発行の『三越』所載の「流行の単衣物」には、「訪問服などとなりますと…共の裾廻し附とし…」とする記述が見られることから、表地と同じ生地を用いた共裾も存在していたと思われる。

以上より、明治時代末期の訪問服の特徴についてまとめる。生地には、縮緬や御召に属する生地を用い、模様と紋については、付ける場合と、付けない場合のどちらかを選択できた。模様を付ける場合は、裾部分に刺繻または織りによって表すことを基本とし、紋については刺繻による繻い紋を3ヶ所に付けていた。また、裾裏については、替わり裾を標準とするものの、共裾を用いることもあった。

## 4、本着物と明治時代末期の訪問服との比較

前章同様、〈生地〉〈模様配置・模様を表す技法〉〈紋〉〈裾裏の仕様〉の4点から本着物の特徴を整理し、その上で、前章で得られた明治時代末期の訪問服の内容と比較する。

#### 〈生地について〉

本着物の生地の素材、及び組織は、絹地の平織りである。但し、経糸、緯糸に使用される絹糸の太さは異なっており、経糸には、緯糸より細い糸が用いられている（図2）。

前章で捉えられた明治時代末期の訪問服には、縮緬や御召に属する生地が用いられていた。両者に共通する特徴は、生地に凹凸が見られる縮織りの生地である点である。しかしながら、本着物の生地には、凹凸は見られず、凹凸を形成する緯糸の加工（撚り糸）も確認できなかった。生地については、前章で得られた一般的な結果とは一致していないといえる。但し、模様を表す技法との関係性からは、本着物の生地は、広義の御召に分類されられると考えられる。その詳細については、後述する。

#### 〈模様配置・模様を表す技法について〉

次に模様については、裾部分に竹と雀の模様が表されている。これらの模様は、全て織りによって表され、黒、茶、薄茶、薄黄の糸で表現されるほか、雀の目と嘴部分の一部には金糸が織り込まれている（図3・4）。よって、前章で訪問服の特徴として指摘した、模様配置（裾部分）と模様を表す技法（織り出し）は一致していると言える。

以下では、再び記事を用いて、織り出しの技法について詳しく見ていく。1910（明治43）年5月27日の『朝日新聞』所載の「今夏の流行（下）衣物には変地質 上には薄コート」の記事には、下記のように記されている。

（訪問服は）…其れ意匠として縫を用うる、織出しで意匠を見せても悪くはないが織出しとなると形が極まるから上りが無器用でどうも堅い、そこへ行くとは縫は自由に且和らかく何んな変化でも出来るといふ調法があるから此頃は好んで此縫を用ふる…（括弧内、及び下線部筆者加筆）

1910（明治43）年5月27日『朝日新聞』所載「今夏の流行（下）衣物には変地質 上には薄コート」

上記の記事より、「訪問服」の模様を表す技法として、刺繻、及び織り出しが用いられていたことを確認することができる。但し、同記事には、織り出しによって表した模様は、形が決まり過ぎて堅い表現になることから、自由で柔らかい表現ができる刺繻の方

が好まれている状況が記されている。このような好みが実際に広がっていたことは、1910（明治43）年8月発行の『婦人画報』所載の「流行の夏衣裳 絹物のいろいろ」、及び1911（明治44）年5月発行の『婦人クラブ』に、それぞれ「縫模様を施すことが大流行でございます。」という記述や、「流行-御召の縫模様」といった記事名が見られることから確認できる。そして、1911（明治44）年の秋頃から、その状況が変わっていったことを以下の記事より確認することができる。

ところは、今秋はじめて市中の各呉服店に陳列致したのは、お召の織り出し模様でございます。これは今迄前に述べたように縞お召、或は無地お召に縫取りで裾模様を表はしましたのを、今度はもう一段略しまして、織る時に模様を出して行くのでございます。縫取りほど凝っていないだけに、何処となく洒落な気の利いたものであります。先ずこれが今秋から冬へかけて最も珍しいものでございませう。…（下線部筆者加筆）

1911（明治44）年11月『婦人画報』所載「菊見の衣裳いろいろ」

問 訪問服といったようなものは何うでせう。

答 訪問服としましては一時全盛を極めました山藪縮緬の紋付などは殆ど影も認められなくなりまして、小紋もこの両三年来更に振ませず、今は共縞お召、無地お召、橘お召などの極く上品なる物を選び、裾へ模様などを刺繍するとか、又は模様なしで紋ばかりを刺繍としますか、さもないれば織り出しお召が最も流行して居ります。

問 織り出しお召と言ふのは之まで餘り耳にしませんものですか。

答 はい、織り出しお召が世に現はれてまだ日の浅い為行き渡つて居りませぬけれども、之は屹度今後流行するであらうと存じます、殊に縞物の代用にもなります事ですから、之から大に流行する事は火を観るよりも明で御座います。（下線部筆者加筆）

1912（明治45）年2月『三越』所載「流行問答」

又お召織り出し模様も訪問服としてはなかなか上品で御座います。之は昨年までは技術の点においてまだ幼稚で御座いましたが、近来非常に進歩致しまして、完全なるものが出来るやうになりまして右の縫模様と大差ない出来となりました。模様は主として地色と同じやうな色にて銀糸とか白で或一部を織り、之で全体の落付いたものを活して見せるもので御座います。此等が本年の訪問服としては最も流行致して居ります…

1912（大正元）年11月『三越』所載「流行 今秋の流行」

上記の記事から、1911（明治44）年の秋以降、織り出しによる「訪問服」が流行していたことを確認することができる。前掲の1912（大正元）年11月発行の『三越』の記事には、織り出しの技術が進歩し、刺繍と同じような模様を表されるようになったことが記されている<sup>12</sup>。さらに、同記事には「模様は主として地色と同じやうな色にて銀糸とか白で或一部を織り」とあり、本着物同様、金属糸を織り込んだ「訪問服」の存在も確認することができる。この織り出しによる「訪問服」は、三越発行のPR誌『三越』で辿ると、1917（大正6）年までその存在を確認することができるが、1918（大正7）年1月発行の『三越』所載の「大正7年流行いろいろ艸」には、下記の通り、織り出しの「訪問服」が用いられなくなっている状況が記されている。

お召の織模様など、初めて生れ出でたる頃には、人みなその精巧に驚きたるに、今は隔世の感あるまでに変化自在の模様を、半正装の御訪問服に見る事とはなんぬ。

1918（大正7）年1月『三越』所載「大正7年流行いろいろ艸」

よって、模様を表す技法の点からは、本着物の制作年代は、明治時代末期から大正時代前期までに位置付けられると言える。但し、本着物に織り出された模様の表現は、大正時代前期のPR誌に掲載されている織り出しの訪問服の図版に見られる模様に比べ、その表現に硬さが残ることから、本着物は明治時代末期から大正時代初期までに位置付けられるものと考えられる。



### 〈紋について〉

次に紋については、背中心、及び後ろ両袖中央の計3箇所配置されており、前章で捉えられた明治時代後期の訪問服の特徴に一致する。紋のモチーフは桐であり、五三の桐と枝が描かれた「桐枝丸」紋を表す。紋を表す技法は、やや太めの白い糸2本を引き揃え、甘く撚りをかけた撚り糸の状態にし、その糸を輪郭線に沿って置き、別の細い白糸で留める、いわゆる「駒繡い」の技法である（図5）。桐の葉の葉脈部分については、輪郭線に用いられる撚り糸よりも、細い撚り糸が使用されている。

本着物に見られる紋の技法を示したと思われる記事を1910（明治43）年5月27日の『朝日新聞』所載の「今夏の流行（下）衣物には変地質 上には薄コート」において、確認することができる。

紋をつけて、トいふてもともとと表張ったのではありませんから、縫ひ紋に限りますね、年の内ははつきりとは申せませんが縫紋といへば絞縫とまで思はれた位の絞縫紋は稍下火になつて来た傾向があるようです。呉服屋も、今冬は芥子暈し縫ひか巻縫、撚撚縫が多いというて居ました。（下線部筆者加筆）

1910（明治43）年5月27日『朝日新聞』所載「今夏の流行（下）衣物には変地質 上には薄コート」

詳細は不明であるが、上記の記事における「撚撚縫」が、文字通り「撚った撚糸を使用した刺繡」と解釈できるならば、本着物で使用されている繡い紋の技法を示しているのではないかと考えられる。大正時代に入ると、紋に用いられる刺繡の技法は、一定の間隔で小さな繡い目を出し、小さな点によって模様を表す芥子繡いが主流になっていくことが確認できる。また、用いる糸も白糸から、銀糸を使用することが盛んになり、紋を目立たないように表現する流れに移行する<sup>13</sup>。

一方、先行研究において、幕末期における繡い紋は、白の諸撚糸や劣等の粗糸（しけ糸）が用いられていたことから、これらの糸では生地を差し通すことはできず、駒繡いの技法で糸を留めていた可能性が指摘されている<sup>14</sup>。このことから、本着物における紋には、幕末期の流れに連なる繡い紋の特徴が認められ、制作年代は明治期に位置付けられると思われる。

### 〈裾裏の仕様について〉

本着物の裾裏には、表地と同様の生地、及び模様が付けられており、いわゆる共裾である（図6）。前章で見た通り、明治時代末期の訪問服の裾裏は、表地と別の生地や色を用いる、替わり裾が基本であった。しかし、記事には共裾の訪問服の存在も1例ではあるが、確認できたことから、本着物がそれに該当する可能性はあると言える。

以上の結果をまとめ、〈生地〉〈模様配置・模様を表す技法〉〈紋〉〈裾裏の仕様〉の4点から本着物の特徴を整理すると、〈生地〉の点を除いて、本着物は明治時代末期の訪問服の特徴と一致することが明らかとなった。特に、裾部分に織り出しによって模様を表した着物は、明治時代後期から大正時代前期の訪問服に特有に見られるものであり、本着物が訪問服である可能性を十分に指摘できると言える<sup>15</sup>。

なお、訪問服の特徴に一致しなかった〈生地〉については、以下の可能性を最後に指摘しておきたい。先述の通り、織り出しで模様を表したものは、その技法の特性上、御召の生地が用いられることになる。よって、織り出しで模様を表す本着物は、御召を生地とすることが相応しいと言えるが、本着物の生地は生地表面の凹凸や、緯糸の撚りを確認することができなかった。

しかし、1932（昭和7）年発行の『西陣史』には、

…既に明治十年前後から台頭して居た平緯の所謂平御召の類も亦漸くその沈着な地風を愛好されるに至る…<sup>16</sup>

という記述が見られ、明治10年前後から台頭していた「平御召」と呼ばれる御召の存在を確認することができる。「平御召」は「平緯」で織られることを特徴とするようだが、この「平緯」は「撚りのかかっていない緯糸」と解釈することができるのではないだろうか。従って、明治時代の御召に属する生地の中には、緯糸に撚り糸を用いない「御召風平織」とも言える生地が存在していた可能性がある。明治期における「御召」の種類、及びその定義については、更なる検証を必要とするものの、本着物に見られる通常の平織りの生地についても、明治期においては御召と呼ばれる生地として扱われていた可能性は高いと言える。

## 5、まとめ

以上より、本着物は、今後の検証を要するものの、〈生地〉〈模様配置・模様を表す技法〉〈紋〉〈裾裏の仕様〉の点において、明治時代末期から大正時代前期に制作された訪問服の特徴を持つ着物であることが明らかとなった。更に、〈模様を表す技法〉については、織り出しによって表される模様の表現が硬い点、及び〈紋〉が白い撚り糸の駒繻いによって表されている点から、本着物は大正期よりも明治時代末期の訪問服の内容に近いとすることができる。よって、本着物は、明治時代末期に、女性たちが人の訪問や花見、菊見、及び集会等において着用していた着物であることが明らかとなった。

最後に、明治時代後期に女性の外出する機会が増加したことに伴い、「訪問服」と呼ばれる着物、或いは「訪問服」という言葉は使用されないまでも、これと同様の特徴を示す新たな着物が誕生したことを踏まえれば、「訪問服」は近代化の中で女性の社会進出を象徴する衣服と位置づけることができるのではないだろうか。その意味において本着物は、社会進出に歩みを進める女性たちの比較的早い時期の衣服を知るための、貴重な資料であると言える。

## 謝辞

本稿をまとめるにあたり、長崎巖教授（共立女子大学家政学部被服学科教授）にご指導・ご助言を頂きました。記して感謝申し上げます。



図 1. 納戸平絹地竹雀模様着物

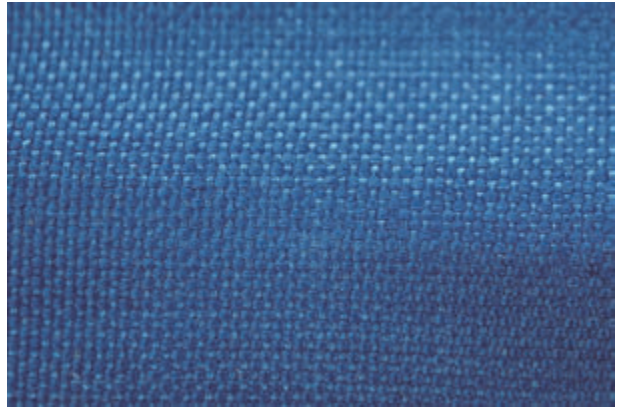


図 2. 生地（組織）



図 4. 織り出し（部分拡大）



図 3. 織り出し（裾部分）



図 5. 繡い紋



図 6. 裾裏（八掛）部分

表1.明治時代末期の訪問服に関する記事の出典、及び記載された特徴

西暦	発行年		出典	生地	模様配置	模様を表す技法	紋(数、技法)	裾裏の仕様
	月	和暦						
1908	5	明治41年	『婦人画報』流行 ▲袴と単	御召(縞御召(たけしほお召))	様	織り出し、刺繍		
	12		『新小説』春の装い			刺繍、織り出し		
	12		『婦人画報』流行 春着の支度	縮緬(壁千代呂、小波縮緬、山蘭の縞縮緬) 御召(縞御召(縞紗御召、瑠璃御召、常盤御召))			縫い紋(芥子量し縫、巻縫い、盤路縫い)	
1909	4	明治42年	『新小説』花見姿	御召(※※お召風の無地に見えて夫で織方の変わったもの、縞御召、紋御召、無地御召(絶と紗の交織))	裾	刺繍		
1910	5	明治43年	『朝日新聞』今夏の流行(下)衣物には麦地質 上には薄コートJ5月27日(6面)	御召(※※無地お召のようなもの、無地御召(透縞御召、金紗御召)、縞御召)		織り出し、刺繍		
1910	8	明治43年	『婦人画報』流行の夏衣裳 絹物のいろいろ	縮緬(香波縮緬、高波紋縮緬) 御召(縞御召、紋御召)		刺繍		
1911	2	明治44年	『婦人画報』二月のよそほい	御召(縞御召、紋御召)	裾/模様無し(※縫い紋の模様)	刺繍	縫い紋(管縫い)	
	5		『婦人クラフ』流行-御召の縫製様	御召	模様	刺繍		
	6		『三越』関西に於ける流行の女軍衣	縮緬(無地御召(縞御召))	※多くは模様無し	織り出し	三つ紋/ー	替わり裾(※共裾は用いない)
	10		『三越』是からの御婦人服	縮緬(紋縮緬、共縮緬、高波縮緬、高浪縮緬)/御召(無地御召、縞御召(縞御召))		刺繍		
	11		『婦人画報』菊見の衣裳いろいろ	縮緬(紋縮緬、共縮緬、高波縮緬)/御召(縞御召(縞御召)、無地御召)	模様無し/裾	ー/刺繍、織り出し	三つ紋、縫い紋/ー	
1912	1	明治45年	『東京日日新聞』花見衣裳(上)・(下)J1月31日(3面)、2月1日	御召(紋御召(大島御召)、縞御召(月華御召)、無地御召)	裾	刺繍		
	2		『三越』流行聞答	御召(縞御召(生縞御召、縞御召)、無地御召)	裾/模様無し	刺繍、織り出し/ー	(模様を付けない場合)縫い紋	
	3		『読売新聞』花見衣 春の流行調査J3月21日(5面)	御召(縞御召(月花御召、縞御召))	裾	刺繍		替わり裾
	3		『三越』弥生の流行	御召(無地御召、縞御召(共縞御召))	裾	織り出し	縫い紋	
	5		『三越』流行	縮緬(三越縞縮緬) 御召(縞御召(共縞御召、縞御召、縞御召、月花御召、縞入縞御召、弥生御召、縞雅御召))	様	刺繍	縫い紋	
	6		『三越』流行の単衣物	縮緬(紗縮緬、小波縮緬) 御召(無地御召(縞御召、縞御召))	裾	刺繍(ドロンワーク含む)	三つ紋、縫い紋	共裾

・上記の表は、記事に記載されている訪問服の特徴から(生地)〈模様配置〉(模様を表す技法)〈裾裏の仕様〉に関する内容を抽出し、まとめたものである。

・御召に関する(生地)については、「無地御召」「縞御召」「紋御召」の3つに大別し、具体的な名称については(括弧内)に記した。

・複数の「訪問服」の内容について記した記事については、それぞれの内容がわかるよう「/」でその区切りを示した。



註

- 1 『共立女子学園コレクション 小袖・着物編』において、本着物の作品解説には、次の通り記されている。「納戸地に竹雀模様を織り表わす。明治時代には織物技術が発達し、織物による打掛などが流行した。薄茶地菊模様打掛（作品 60）や白茶地松竹梅鶴亀模様打掛（作品 61）のように伝統的な模様を細かく繰り返して織り表わすほか、この作品のように、それまでは織り技法で表わされなかった大柄で絵画的な模様が表現されるようになった。この着物では、納戸地に黒・茶・糸のみで印象的に模様を表わしている。このような織り技法を用いた着物でも、友禅染を中心に模様を表わした着物と同様共裂を裏にまわし、八掛模様としている。」
- 2 今日においては、「訪問服」という言葉よりも「訪問着」という言葉の方が一般的な言葉として用いられている。しかし、明治期の新聞・雑誌記事等においては「訪問服」と表記されている場合が多いため、本稿においては当時の新聞・雑誌記事の原文を除いて「訪問服」という言葉を使用する。
- 3 今村由美子「20 世紀前半における女性の着物の変化―社会進出や生活様式の変化が着装に及ぼした影響について―」『服飾文化学会誌』、12（1）、2011、pp.103-116。  
田中敦子編『主婦の友 100 年きもの宝典―きもの花咲くころ、再び』、主婦の友社、2016、p.106。  
澤田和人「商品展開から見た近代女性の服飾―染織史学形成の時代背景を探る」、奥平俊六先生退職記念論文集編集委員会編『晝下遊楽』、2018、pp.645-671。  
※横川公子編『武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室秋期展覧会 ハレの日のきもの―近代の裾文様―』、武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室、2019、p.18。において、現存品に見られる訪問服が掲載されているものの、各時代や時期における「訪問服」の特徴との検証作業は行われていない。
- 4 前掲書 3、今村、p.105。
- 5 高橋晴子『日本人のすがたと暮らし』、三元社、2016、pp.285-288。においては、1904（明治 37）年 5 月『新小説』所載の「春の裾」が最も古い部類に属する記事として紹介されている。なお、洋服における「訪問服」については、それより早い時期において確認されており、それについては同書において示されている。
- 6 本稿で使用した新聞・雑誌記事の引用部分にあたっては、漢字表記、かな表記を基本的には常用漢字、及び現代仮名づかいに改めた。
- 7 現在の「訪問服」は、縫い目に関わらず肩から胸や袖にかけて模様が繋がる、いわゆる絵羽模様であることを特徴とする。
- 8 前掲書 3 に同じ。
- 9 本稿では、裾全体に模様を配したもの（狭義の裾模様）、裾部分だけに模様を配したもの（裾模様）も含め、広義の意味での「裾模様」という言葉を使用する。
- 10 1911（明治 44）年 11 月発行『婦人画報』所載の「菊見の衣裳いろいろ」や 1912（明治 45）年 2 月発行の『三越』所載の「流行問答」の記事に見られる。
- 11 前掲書 3、澤田、p.659。
- 12 織り出しの技術が精巧を極めたことを記した記事は、1913（大正 2）年 3 月『三越』所載の「秋の流行問答」においても確認できる。「問 訪問服としての流行を承りたいものです。答 近來お召縫模様又は織出し模様が訪問服として著しく流行して参りました、縫模様は之までしばしば御紹介致しましたが、織出し模様もなかなか精巧に出来るようになりまして殆ど縫模様に匹敵する位のものが出来て参りました。」
- 13 大正時代前期の「訪問服」の繻い紋の技法について記した記事は、下記の記事において確認できる。  
1913（大正 2）年 3 月『三越』所載「秋の流行問答」  
「問：（訪問服の）紋は何ういふ風にします。答：何れも縫紋で御座いまして、之もすが縫とか縫織の如く重くるしいものよりも、軽い芥子縫が流行致して居ります。其糸の如き白いものよりは薄い銀鼠又は銀糸などを用ひる事が流行致して居ります。」  
1913（大正 2）年 5 月『三越』所載「夏の流行は斯あるべし」  
「以前は瞭然したもので御座いましたけれど、昨今の流行は陰で細く芥子縫ひの如く白で縫ひ、若し地色の濃いもので御座いましたらならば、銀糸で陰にぼかすとか芥子縫にするとか、近來銀糸を縫紋に應用する事がなかなか盛んになつて参りました…縫紋も普通の紋といふよりも替紋を用ひます事が多くなかなか凝つた紋が御座います。」  
1915（大正 4）年 6 月『三越』所載「夏の御訪問服」  
「御訪問用…御紋は三ツ紋にて芥子縫の陰、銀糸を配ひなば最も妙、模様はこの他種々。」
- 14 前掲書 3、澤田、p.659。
- 15 織り出しの技法を用いた衣服には、「訪問服」以外に同時代の羽織において、その使用が見られる。
- 16 佐々木信三郎『西新史』、思文閣出版、1932、p.417。

# A Study on A Folding Screens of Merry-making under Blossoms (kaka yūraku) by Kyoritsu Women's University Museum (An analysis of the Workshop of Hishikawa Moronobu (Hishikawa School))

Kondo Takashi

[Abstract]

In this paper, I have attempted to examine the A Folding Screens of Merry-making under Blossoms (kaka yūraku) in the collection of Kyoritsu Women's University Museum, what kind of work it is, its outline, the style of painting, the background of its production, and the assumption of the client. First of all, on the screen of the work, there are many inherited patterns and figures from the printed books, prints, and handwritten paintings of Hishikawa Moronobu, an Edo period ukiyo-e artist. By analyzing the coincidence of these patterns and figures, I concluded that the subject of this work is a depiction of Hanami (cherry blossom viewing) in Ueno and a genre scene in Yoshiwara. I also pointed out that the artist of this work was most likely Hishikawa Moronobu and his school of painters, and that this work shows an aspect of the Hishikawa School workshop after the death of Hishikawa Moronobu. Furthermore, by analyzing the information that can be read from the painting, I assumed that the order was placed by a wealthy man from a samurai family, especially one with strong feelings for Yoshiwara prostitutes. This is the "male gaze" toward women in the Edo period, and is also a part of the power structure in the Edo period. This work can be seen as a representation of this.

# Kimono with bamboo and sparrow on blue plain silk ground of Kyoritsu Women's University Museum

Furukawa Saki

[Abstract]

This study investigates the possibility that the blue plain silk kimono with bamboo and sparrow Motifs (hereinafter "this kimono"), which is owned by the Kyoritsu Women's University Museum, should be understood as *hōmonfuku* ("visiting wear") from the late Meiji period, as established by the features identified in this work.

First, we present an overview of *hōmonfuku*. Next, we discuss the state of *hōmonfuku* at the end of the Meiji era, using newspapers and magazines published during the era and publicity magazines published by Mitsukoshi Gofukuten. Specifically, the features were organized in relation to four perspectives, namely fabric, techniques of pattern arrangement and expression, crest, and designs on the hem lining of the kimono. We examined whether this kimono was *hōmonfuku* or not by making comparison between the characteristics of *hōmonfuku* at the end of the Meiji period and the characteristics of this kimono, which were arranged during the previous stage.

It was found that except for the point of the fabric, this kimono matched the features of *hōmonfuku* of the late Meiji period as derived from the literature. In particular, it was found that kimonos with patterns created by weaving on the hem lining of the kimono were unique to *hōmonfuku* of the late Meiji period to the early Taisho period; hence, it is highly likely that this kimono was *hōmonfuku*.